三月の雲

小林守城

メガネがくもる
色づいた脂質の膜をうかべ
ことしの三月
わたくしはまだ生きていく

筑波寝の空に
雲一線を引いてゆく
とおいとおい旅客機よ
何処へ
活断層のように輝いて
一点の金属の汚れた孤島
成層圏はまだ遠い

綿雲にうかぶ脂質は
透き通るレモンの汁で
拭きとればいいか
ことしの三月
わたくしはまだ生きていく

罠

小林守城

風景に疎んじられても
夢は自ら覚めることはない
覚めたくない力が自ら働いている
とんでもない悪夢になろうと
合い鍵は外の誰かに
預けてしまったのだ

ほらこれがぼくらの罠
想定外はみな神さまのまねごと
かかったぼくらは囚われて
自由の星と思っている
閉ざされている空よ
ぼくたちの神話よ

もういやだ
既に日は山際にかかり
合い鍵は外の誰かに
預けてしまったのだ

三月の霙（みぞれ）

わすれずに叢生（そうせい）した水仙
手足はまだ　縮（ちぢ）かんでいても
枯れ枝に鳥が来て見ている
下草の芽立ちを見ている
フクシマの空から渡ってきたか
鳥たちよ　その高みから
蠢（うごめ）いているわたしたちが見えるか

嘯（うそぶ）いてもすぐに割れてしまう
一人ひとりの街角や野末で
なんどでも循環・共生の
お札を売ろう
三月の霙　痛く浸み込み

やがてふる里はさつきの季節
よみがえれ　オオサカズキ
名もない原野の
母のような赤い花
いまや汚れた
もんぺを穿いて

神さびて情けましたる春の雌猫（ねこ）
今年は一段とくるおしい

小林守城